

## パネル 「宗教研究と地球環境問題—国際グローバル理解年のために—」 要旨集

岡田真美子	趣旨説明	p.1
木村 武史	全体のまとめ	p.2
カール・ベッカー	宗教研究から見えてくる宗教と地球環境問題	p.3
サラ・フレデリクス	環境問題に抱く恥の感情への宗教的応答について	p.3
馬場 紀寿	仏教と環境運動	p.4
土屋 昌明	道教にみる人と自然の関わり—洞天思想を中心に—	p.5
小原 克博	コメント	p.6

### 趣旨説明 「国際グローバル理解年について」

岡田真美子（日本学術会議会員／日本宗教研究諸学会連合運営委員）

国際委員会企画・日本宗教研究諸学会連合共催の特別パネル「宗教研究と地球環境問題—国際グローバル理解年のために—」の開幕に当たり、司会をしているパネル代表の代わりに、日本学術会議哲学委員会の岡田より、簡単にその趣旨の説明をいたします。

本年 2016 年は、パネルの副題にある「国際グローバル理解年」IYGU (International Year of Global Understanding 邦訳「国際地球理解年」) に当たります。「国際地球理解年」の目的は、人々の身近な行動がどのように地球規模の影響を引き起こすのかを理解し、気候変化、食糧問題、人口移動問題などの深刻な地球規模の環境問題に対して、より良い改善策を示していくことです。ひとことでいうなら、地球規模の思考と身近な行動の間に橋を架ける努力を起こそうという年であるということができます。

IYGU 国際地球理解年を支える科学者集団は、自然科学、社会科学、人文科学にまたがる ICSU (国際科学会議)、ISSC (国際社会科学評議会)、そして宗教学会の理事であり、日本学術会議哲学委員会幹事である藤原聖子先生もコミットされている CIPSH (国際哲学人文学会) です。日本学術会議も、活動の柱の一つに、持続可能な地球環境に寄与する実践的な研究イニシアティブ「フューチャー・アース」の推進を上げており、その一環として国際地球理解年を支援しています。IYGU 国際地球理解年の活動の最も重要なポイントは、どのようにして科学的な知見を、より持続可能なライフスタイルの選択に活かすことができるかということにあります。それでは宗教研究の立場からはこの問題にどのような貢献ができるのでしょうか？ これを考えるのが本日のパネルの目指すところです。

本日のパネルは、長らくサステナビリティの研究に携わってこられた木村武史先生が企画してくださり、いち早く趣旨に賛同してくださったカール・ベッカー先生にもお加わりいただいて登壇者の人選を進めました。幸いなことに気鋭の環境宗教学者である Sarah E. Fredericks 先生をアメリカからお迎えして、国際的なパネルとすることができました。諸学会連合からは、仏教研究者として実際に河川環境を保全する活動に関わってこられた馬場紀寿先生、道教の立場からこの問題を考察してこられた土屋昌明先生にご登壇いただき、早くからシャープな視点で環境問題を論じてこられた小原克博先生にコメントをいただきます。これから 16 時まで、木村先生の司会で、多様な視点から有益な議論が展開されることを大変楽しみにしております。

## 主旨と全体のまとめ

木村 武史（筑波大学／日本宗教学会理事・国際委員会委員長）

ユネスコと関連国際学術団体は2016年を「国際グローバル理解年(IYGU)」として位置づけている。その主要なテーマはサステナビリティであり、このテーマにいかに関係する宗教研究は応答できるかを問うために本パネルは企画された。地球環境問題は複雑で重層的であり、宗教研究も多様であるので、このようなグローバルな要請に対する応答も多様に展開できる。本パネルでは、日本の宗教研究の最前線の声を聞き、議論を深めた。

ベッカーの発表要旨。世界の宗教を見渡すと、それぞれ正反対に思われる価値観を唱えてきた例が目立つ。しかし表面的には違うように見える価値観や倫理観でも、サステナビリティを目的としていたという点において、共通している。例えば、人口の安定性、病因を避ける公衆衛生、労働倫理や所有物観念などについて、宗教は表向きには異なる掟を唱えていても、いずれの目的も社会や世界の持続性を目指すものであった。状況が激変する現在、各宗教の表面的な文言よりは、その裏に潜む智慧を宗教学的に理解すれば、地球環境に対して取るべき姿勢が見えてくるのである。資本や物質に還元できない精神に人間が価値を置くように導かれるかが、環境問題解決の鍵を握る。

フレデリクスの発表要旨。気候変動に関する従来の倫理的考察では社会的・感情的意味合いについてはあまり注意が向けられてこなかった。気候変動における自分自身の役割について恥を感じることによって環境への倫理的コミットメントを認め、促すことができるようになると考えられる。それゆえ気候変動に関する倫理的感情、特に恥の問題は倫理的な応答を考察する際に重要である。宗教倫理研究者はこの点で特別な役割を果せる。というのも人間の限界性を示し、自然の再生の儀式でこれらの理想を示す宗教的な人間性の概念と倫理的理想とを結びつけられるからである。これらの三つの要素は、恥の感情の陰にある否定的な行為と自己の概念に対処するために必要であり、個人と社会にとって新たな方法を見出し、実現することが可能となる。

馬場の発表要旨。環境運動を人々に促す動機、環境運動が成功する条件という視点で、仏教と環境運動について論じる。第一に、環境保全を促す、あるいはその動機づけになる（可能性のある）初期仏典や大乘仏典の思想を検討する。第二に、奥入瀬川の環境保護運動にかかわった自らの経験から、日本の環境運動に広く見られる動機について考察する。第三に、環境運動が成功する条件をめぐる先行研究を踏まえて、今後の環境運動において仏教の果たしうる役割を指摘する。

土屋の発表要旨。「道教」は中国古来の神仙思想や道家思想から成り立った宗教である。「洞天」とは、道教の世界観のうち、山中の洞窟内にある神仙世界であり、その世界は通路によって別の洞天と結びついているとされる。洞天にもとづく考え方を「洞天思想」という。洞天思想は、洞窟の神秘に対する畏怖に由来する。五世紀半ばの道教では、洞天思想はすでに中核的であった。洞窟だけでなく、洞窟が存在する山岳が宗教的な重視を受け、そこにある植物・動物・鉱物・景観などが特殊な意味を持っていた。このような伝統的な宗教観の結果、今日でも洞天周辺の自然環境は保全されている。

小原によるコメントの趣旨。個々の発表が提示する問題点をさらに展開し、大きな物語の回復の必要性、宗教と世俗社会とのインターフェース構築の重要性、キリスト教界における環境的回心や文脈化神学の動向からの提言がなされた。

## 宗教研究から見えてくる宗教と地球環境問題

カール・ベッカー（京都大学／日本宗教学会理事・国際委員）

諸宗教間には、倫理や規則の面で、表面的には大きな差異があるといえる。しかし、宗教学の観点から考えると、今日まで存続している諸宗教はより深いレベルで、サステナビリティ（持続可能性）を発展させ、支持してきたという共通性があるといえる。例えば、人口密度の高低によっては、性生活や「間引き」（幼児殺し）に関する掟なども様々であったが、いずれもサステナビリティ（持続可能性）を目指したものであった。あるいは、公衆衛生についても、宗教によっては、食べて良いものと禁止されるものは全く違うが、結局それらの掟もサステナビリティ（持続可能性）を目標にしていたと言えよう。

物を所有するという点については、ほとんどすべての宗教が知恵・慈悲・自己否定・他者を助けることの方が、富・所有物・個人的名声よりも限りなく重要であるという点で同意している。世界宗教に見られる共通のテーマは、富や所有物の物質的価値よりも自己鍛錬や自己否定の精神的価値を称揚することにあるといえる。

重要な点は、ある特定の宗教や社会が永遠に正しいということではなく、これらの世界観のそれぞれがその社会的・環境的状况への応答であるということ、平和とサステナビリティを約束する方法が常に継続的に探究されるべきである、という点である。

後半には、諸宗教の共通の前提にみられる価値観に基づいて、未来の倫理行動に関する含意を考えてみた。

安定的な平和と人口制限を含むサステナビリティ、環境保護、物質的価値よりも精神価値をより大切にするという宗教間に見られる共通点は、未来においても極めて重要な視点と言えよう。伝統的な諸宗教においては、不平等はサステナビリティを危機に晒すことを知られていたし、精神的豊かさより物質的豊かさの方に価値を置くと人々の間に不満が広がることも知っていた。

以上の議論を要約すれば、宗教倫理と実践の研究からサステナビリティは第一段階であることが明白である。第二に、(アグロ・ビジネスや巨大薬品企業を含め) ビジネスが搾取や汚染をすることは許されない。そして、何よりも物質的所有や消費を価値あるものとする世界観から平等・知恵・精神的価値をより重視する世界観へと転換しなくてはならない。これらの共通する宗教的真実を学ぶ、実践することによってのみ、我々自身の幸福と地球上の人類の未来を見出すことができる。

## 環境問題に抱く恥の感情への宗教的応答について

サラ・フレデリクス（シカゴ大学／日本宗教研究諸学会連合による招聘）

気候変動に関する倫理的研究は、今までその物理的および経済的不正義に重きが置かれ、感情的・社会的意味合いにはあまり注意が向けられてこなかった。最近、気候変動に恥を感じているために環境問題に取り組もうとしていない人でも、環境問題への解決への向けての倫理的コミットメントを培えるようになると論じる人々が出てきている。それゆえ気候変動に抱く道徳的感情、特に恥の感情に取り組むことは、気候変動に対する十全な倫理的応答の重要な一部を構成するといえる。本論では、ジョン・P・タングネイの罪と恥の定義に依拠する。彼女によれば、罪と恥は自分の行為、思想、自己自身に関わる道徳心についての自己意識的な感情であり、関係論的な概念である。罪は通常特定の行いに関係し感じ、問題を修復しようとするが、恥の感情は痛みの感情を伴い、自らの全体的自己に関わってくる。

環境問題と感情の関係で重要となるのが、地球環境と人間の関係を回復することを目指す「回

復の儀礼」である。というのも、儀礼は参加者のアイデンティティを創出し、維持するからである。儀礼に参加する以前の自己とは異なるアイデンティティを作り上げる。共同体は信条と実践において儀礼の参加者を支援するので、個人のアイデンティティは他の儀礼参加者の経験と固く結びついてくる。儀礼の一種である「苦悩の儀礼」は「秩序が乱された状態を正常に戻そうとする」ものであるが、気候変動に抱く恥の感情にとっては特に関連性がある。「苦悩の儀礼」は人間の限界を認め、限界性に対処する仕方を示し、希望を回復しようと試みる。

地球環境に関わる苦悩の儀礼の幾つかは、ジョールダン、レヴァサール、ファン・ヴィーレン、メーシーらの研究者や活動家らによって取り上げられている。人々とローカルな環境とグローバルな環境、特定の生物種、そして究極的実在との調和を取り戻そうとするには、気候変動に抱く恥に応答する数多くの種類の苦悩の儀礼が必要とされる。そのような儀礼は、気候変動についてのかかなり異なる経験とかかなり異なる解決への寄与をしている二つ、あるいは三つ以上の共同体間に意識的なつながりをもたせようと試みが求められる。そのような共同体は政治的にも経済的にも、そして宗教的にもかなり異なる背景を持っている。そのようなパートナーシップは、姉妹都市、世俗的共同体や宗教的共同体の中で人気のあるプログラムなどの間の諸関係に基づくことができる。

宗教研究者は、このような儀礼を構築するのに重要な役割を果たすことができる。社会科学の立場の研究者は気候変動に抱く恥のような道徳感情の存在とそれが持つ意味合いについて観察し、記録することができる。儀礼研究者は既にある環境儀礼や現在創出されつつある環境儀礼を観察し、修正の方向性について分析することができる。倫理研究者は感情と儀礼がもつ倫理的境界、それらの含意、共同体が行う応答、そのような応答における宗教研究者自身の役割を分析し、判断し、建設的な提言をすることができる。特定の信仰共同体とつながりのある宗教研究者は、新しい儀礼を企画し、実践に移し、洗練させることができる。宗教研究者は気候変動に抱く恥の感情を含む気候変動の影響についての包括的な視野を形成するのに貢献することができる。そのようにして、気候変動に抱く恥に対応することができ、同時にまた気候変動への対応も可能となる。

## 仏教と環境運動

馬場紀寿（東京大学／日本宗教研究諸学会連合運営委員）

仏教は環境保護について、①仏典と②教団の両面から考察する。仏典には仏教信者が守る五戒の一つとして命ある者（人間・動物）を殺すことが戒められ、また、出家者の生活規定をする律に草木の伐採が禁じられるが、仏典自体に自然環境を保護するという理念はない（Lambert Schmithausen, *Early Buddhist Tradition and Ecological Ethics*, *Journal of Buddhist Ethics* 4, 1997, pp. 1-74）。むしろ、仏教が自然環境を保護するという評価が高まったのは近代的な現象であり（David L. McMahan, *The Making of Buddhist Modernism*, Oxford: Oxford University Press, 2008, pp. 117-147）、近代の人々によって、古代の仏典の中から環境保全を促す思想や実践が発見されたのである。

それでは、アジア各地で実際に仏教が環境運動に貢献している例は、どのように捉えるべきであろうか。この問題について、奥入瀬川（青森県）の環境保全運動にかかわった自らの経験を通して認識したのは、鬼頭秀一氏の「よそ者理論」と丸山真男氏の「個人析出」類型論の有効性である。鬼頭秀一が調査した環境運動は、地元の住民運動が「よそ者」と連携する場合に成功することを指摘している（鬼頭秀一『自然保護を問いなおす—環境倫理とネットワーク』ちくま新書、1996年）。また、丸山真男は、近代化における個人と社会の関係を、①自立化、②民主化、③私化、④原子化という四種に分類し、①が結社を形成し、政治的権威に遠心的であり、地方自治に熱心であることを指摘している（丸山真男「個人析出のさまざまなパターン」『丸山真男集第九巻 一

九六一～一九六八』、岩波書店、1996年)。両者の研究を踏まえると、今後、環境運動において仏教がなす貢献は、その思想そのもの以上に、僧伽や寺院を媒介として住民と「よそ者」とが連携するネットワークを提供する点にあると思われる。これと同じことが開発など、環境運動以外にも確認できることが予想される。

## 道教にみる人と自然の関わり—洞天思想を中心に—

土屋昌明（専修大学／日本道教学会理事）

「道教」は中国古来の神仙思想や道家思想から成り立った宗教である。「洞天」とは、道教の世界観の一つであり、山中の洞窟内にある神仙世界である。洞天は、地上世界と同じ景観を備え、住居があり、神仙が住んでいる。神仙の食品や神仙になる方法が書かれた書物がある。別の洞天と地下で結びついている。修道した人は洞天に至ることができる。このようなイメージーションにもとづく思考方法を、本研究では「洞天思想」と称する。

洞天思想は、四世紀半ばの茅山（江蘇省）の道教においてすでに中核的地位にある。『真誥』によれば、茅山には「金壇華陽洞天」が存在する。この洞天は、巨大な地下石室であり、太陽と月が内部を照らしており、草木や川、鳥や雲や風などがある。この洞天は、東は林屋山（江蘇省）、北は泰山（山東省）、西は峨嵋山（四川省）、南は羅浮山（広東省）の洞天につながっている。その他の洞天へも通行できる。ここには茅山の神の宮殿がある。中国には三六カ所の洞天が存在し、この洞天は、その第八洞天である。

茅山には複数の鍾乳洞が存在し、うち「華陽洞」は現在でも立ち入ることができ、瞑想に利用されている。ここは「金壇華陽洞天」への入口の一つと歴史的に考えられてきた。

天壇華陽洞天と地下でつながる林屋洞は、太湖の島の巨大洞窟であり、道教の「靈宝経」が出現した神話の由来となっている。つまり、洞天思想は特定の教団を超えて共有されていた。また、教団内だけでなく、一般の人々および知識層にも知られていた。洞天思想は、唐代において司馬承禎（六四三～七三五）が「十大洞天」「三十六小洞天」「七十二福地」を提示し、玄宗皇帝がそれによって国家の道教祭祀をおこなった。

道教では、宇宙には「気」が充満しており、「気」は地上のあらゆる存在の根元であり、生命力の源とされた。天も地も人も「気」から成り、天空に「気」が流れるように、大地にも人の身体にも「気」が流れている。したがって、天空と大地と人間は相互に関連している。洞天は、天空のアナロジーであり、かつ人間の身体と対応している。それゆえ、人間が天地と同じく永遠の生命を獲得するには、優れた「気」を身体に導入し、その流れを良好にしなければならない。洞天は、優れた「気」が集まる場所であるから、「気」を導入する実践にも適している。司馬承禎によれば、「坐忘」「服気」によって身体と身体内の「神」を調整し、最終的には「金丹」を服用する。洞天はその実践に必要な条件を完備している。

道教徒は自然環境を「気」との関係から考える。道教の戒律『老君説一百八十戒』によれば、「野原や山林を焼いてはならない」「みだりに樹木を切ってはならない」「みだりに草花を摘んではならない」「漁撈をおこなって生き物を殺してはならない」「鳥や獣を網で捕獲してはならない」「池や井戸を埋めてはならない」「鳥や獣を驚かせてはならない」などの自然保護的な戒律がある。こうした戒律は、優れた「気」を備える自然環境の保護のためというより、むしろ自己の修養の問題に結びついている。道教において最も重要なのは、自分の外部の自然環境ではなく、自分と「道」（宇宙の根源）の関係であり、内在世界である。個人は、完全に唯一の「道」への可能性（「道性」）を賦与されている。それゆえ「道」に対して責任がある。戒律にみえる行為は、「道」に対する責任への背反になる。俗人の持つ「気」は悪質であり、洞天の「気」を汚すばかりか、洞天に住む神仙を不愉快にさせる。それは、その地で修道する道教徒だけでなく、国家祭祀にとっても不

利である。このような宗教的歴史的要因の結果、洞天では現在に至るまで自然環境が比較的保存されている。

## コメント

小原克博（同志社大学／日本基督教学会理事・本部幹事）

環境問題のような地球規模の大問題の前では個人の力はあまりに非力である。国際機関や各国政府の取り組みが求められるのは言うまでもないが、長期的な視野で見れば、問題解決に向けた宗教研究からの固有の貢献もまた過小評価できない。宗教伝統が持つ豊穡なリソースを現代の文脈に即して再解釈し、問題解決に資する実践的なものにしていくことはチャレンジングな課題である。

ベッカー氏は、宗教の違いにかかわらず、「持続可能性」は、すべての宗教が保持しようとしてきた共通要素であると主張し、現代の諸問題を克服するためには、所有欲や消費主義に基づく生活から、スピリチュアルな価値へと我々の世界観を変えていかなければならないという。しかし、近代化の中で宗教は急速に私事化し、コスモロジカルな次元は急速に失われていった。このような現状の中で、いかに地球環境や未来世代を積極的に視野に入れることのできるスピリチュアリティを提示できるのかを問う必要があるだろう

フレデリクス氏は、環境問題に向き合うための人間の基本感情として「恥」を取りあげられた。恥という道德感情をよりポジティブに機能させるために必要な道德教育や儀礼をいかに設計できるかが課題となるだろう。同氏がキーワードの一つとして用いている「修復的正義（司法）」（restorative justice）は日本社会では、まだ十分に認知されていないだけに、今後、宗教研究の領域においても取りあげていく価値があると言える。強者がその正義を一方向的に押しつけるのではなく、加害者と犠牲者が共に問題解決にかかわろうとする姿勢は、環境問題において有効に働く可能性がある。

馬場氏は、仏教が潜在的にもつ、環境問題に対する思想的な貢献を指摘しつつも、その実践的な可能性を具体的に示された。寺院が、環境保全が問題となっている地域住民と外部の人間とを連携させる場となれば、それは仏教が取り持つ新しい公共性を開拓することになるだろう。

土屋氏は、道教の世界観を丁寧に説明された後、道教に自然保護的な戒律はあるものの、重要なのは自然保護そのものではなく、むしろ、自己修養を可能にさせる「道」（宇宙の根源）との関係性であることを指摘された。この視点から「道」に対する責任が生じてくるのであり、結果として、道教の影響力が強い地域では自然環境が比較的良好に保全されていることも理解できる。

以上の論点を踏まえ、宗教研究と地球環境問題を取りまく課題を次のようにまとめておきたい。

（一）私事化が進行する宗教世界において地球環境問題を取り扱うためには「大きな物語」を、ポストモダニズム的言説に抗して回復する必要があるのではないか。それは個別の宗教伝統を関係づける物語として構築される必要があるだろう。

（二）環境問題に取り組むためには、宗教間のネットワークだけでなく、世俗社会との対話や連携を可能とするインターフェースが必要ではないか。それは、地方における地域共同体や、社会的弱者（環境汚染の被害者）の声をくみあげるものであるべきだろう。

（三）気候変動のようなグローバルな課題を自分たちの課題として認識するためにはローカルな宗教文化を積極的に活用すべきではないか。キリスト教の場合、2015年6月に教皇フランシスコが「環境的回心」を呼びかけた回勅『ラウダート・シ』のようなトップダウン型のメッセージもあるが、その一方で、アジアにおける環境問題への対応は、各地の文化的背景との対話を重視した「文脈化神学」の一環として行われている。